

関屋俊彦教授 略年譜

昭和二十一年（一九四六）

四月一五日、広島県大竹市に関屋惣輔（平成一四年六月二五日・九一歳没）・道子（平成二六年七月一〇日・九四歳没）の長男として生まれる。以下、あらあら記しておくこととした。関西大学出身者であるのに、後輩を育てるのが下手だった罪滅ぼしとして、私を超える後輩に出てもらいたく何らかのヒントにでもなるかと、また、どのようにして、国文学への道を歩むようになったかを知ってもらうのもいいかと思つてのことでもある。

父は海軍少尉まで進み、最後はイ号潜水艦艦長として沖縄突撃に向かうはずだった。なぜか父の艦だけ動かなくなり出航出来ず、生還し、私が生まれたこととなる。大竹は、海も山も川も近く、家の庭には虫も飛び、つかまえて蚊帳の中に入れて楽しんでた。まるで『源氏物語』の世界である。覚

えてはいないが、近所のお姉さんに作詞家の石本美由紀の家に連れて行ってもらったこともあるようだ。海田市のおばのところで、のちに『酒』の編集長になる佐々木久子に抱っこされたこともあるようで、酒好きの原点を知りたく、お会いしたかったお一人である。そのうち、大工場が出現し公害問題も発生したが、東京からマンションに引っ越してくる人たちに憧れを感じていた。また、河野先生は名医で、戦後の皆貧しかった大竹市民に尽くされ、私も将来は医者になりたいと思つたくらい河野医院通いをしていた。

昭和二十八年（一九五三）四月～昭和三四年（一九五九）

三月、大竹小学校。

本好きであった。学校に通う道も本を読みながら通っていた。ポケモンGOに夢中になる若者の気持ちもわからなくなはない。本好きになったひとつのきっかけは「トラウマ『東海道

四谷怪談』(『矢の会』五八号)に記した。近所に手作りの雑誌を配ったこともある。本屋の息子が羨ましかった。新聞部の部長だったこともある。五年生まで級長をつとめた。しかし、体操だけは、評価2だった。

毎年、学芸会の主役でもあった。模範朗読が校内放送で流されたこともある。舞台に親しみがわくのは、こうした経験もあったからであろう。

昭和三四年(一九五九) 四月～昭和三七年(一九六二)

三月、修道中学。

昭和三七年(一九六二) 四月～昭和四〇年(一九六五)

三月、修道高等学校。

修道には、大竹から蒸気機関車と広電に乗り換えて、一時間半かかった。今でも朝六時四十五分大竹駅発の時刻は覚えている。早朝から弁当を作ってくれた母にも感謝。元藩校の進学校で周りは賢い男子ばかり。しかし、国語だけは平均点以下をとった覚えはない。現代文の下中昭三先生にはかわいがられた。漢文の鬼塚尚而先生の『論語』の宿題は図書館で吉田賢杭の新釈漢文大系を使って報告し、褒めてもらえたのがうれしかった。物理の宮崎幸治先生が担任だったころ、よく私の書いた学級日誌を皆の前で読んでくださった。当然物

理もがんばったのだが、結局、理系向きではなかった。数学の片山顕親先生が担任だったころ、毎日百問の宿題が課せられ、その時だけは数学は強かった。結局、担任の先生に影響されるが多かったようである。英語は出来なかったのに、なぜかクラスの皆さんの支持もあり代表で暗唱大会に出たこともある。身振り手振りのパフォーマンスは好評だったが、ある発音の間違いを指摘された。やはり演じることが好きで、今も外人に話しかけられて英語で答えるのがうれしいのは、語学力というより片言でも異国の人と気持ちを通じ合いたいと思っているからかも知れない。

昭和四〇年(一九六五)

四月～昭和四二年三月、広島YMCA学園予備校。

米倉利昭先生から国文学を勧められる。『枕草子』の添削を受けていたのがそもその始まりだったかも知れない。今でも『枕草子』の文体は好きである。まさに人生の転機。「生みの親米倉利昭先生」と位置付けている。故湯之上早苗先生や相原和邦先生、のちに国文学研究資料館館長になれる伊井春樹先生にも習った。稲田利徳氏を含めると広大系の先生には目をかけられた。国文学に進むことを応援してくれた予備校の主事だった福井康雄先生は今でも慕われていて広島で定期

的に困む会が行われている。

昭和四二年（一九六七）

四月、関西大学文学部国文学科入学。博士課程まで揃えている大学、宗教に偏しない大学との自分なりの基準があった。「正義を権力から守れ」のキャッチフレーズが胸に響いたからかも知れない。『国文学』一〇〇号に中世の先生方の話を書いている。万葉集の先生が三人もいらっしやったが、思えば、まさに綺羅星のごとき諸先生方であった。しかし、二年生から全国に吹き荒れた大学紛争に突入。岡見正雄先生の研究室で『日本能狂言集』青焼きコピーを読む会が始まった。くずし字を読むきっかけであった。のちに先生の使われた部屋を使用することとなり、恐縮している。「室町ごころ」の名論文を著され、存在そのものが「中世」であった。清水好子先生の授業は『紫式部集』であった。学生運動の激しい時期だったので授業日数は少なかったのかも知れないが、それにしても一年間で進んだのは三首だけだった。岩波新書に著された時、その美しい文体に驚いたものである。私にとつては『源氏物語』は清水好子・石田穰二校注の新潮社版に限る。又、米倉先生から松田修のようになるといわれていたが、逆に追っ掛けまでした。氏が「大蔵虎明の『わらんべ草』批判をされ

ていたからであるが、今なら逆批判も出来る。豊潤なことは操り、当時のスターであった。下宿は山の谷、西野荘の三畳の間。結局、十年間お世話になった。修道の同級生・岩上明義君を頼った訳である。

昭和四三年（一九六八）

山崎正和先生の講義はとつたが、最初と最後の授業しか出ていない。演劇部に入ったこともあり、生意気盛りだったのである。実に惜しいことをした。網干善教先生の授業も受け、のちの高松塚古墳の発見のいきさつもありアルタイムで目撃している。

昭和四五年（一九七〇）

四月、伊藤正義先生が松蔭女子学院大学から関西大学に赴任され、厳しいがホンマモンを直感し、以後、指導を仰ぎ、平成二一年一二月二日に七九歳でなくなられるまで「育ての親」となった。のちに藝能史研究会に出没し、北川忠彦氏の厚遇を得、大阪能楽観賞会に出入りするきっかけも作ってくださった。『伊藤正義 中世文華論集』（和泉書院）第二巻に思い出話も含めて記している。

三島由紀夫事件勃発。翌日の谷澤永一先生の授業に珍しく出席。まさに口角泡を飛ばす講義であった。級友の松井俊彦

君（のちに禅僧）が、卒論を書き直さなくてはとぼやいていた。清水明雄君も級友のひとり。父君は三島由紀夫の名付け親・清水文雄氏である。しばらく氏の文章に魅了された。

昭和四六年（一九七二）

三月、関西大学文学部国文学科卒業。卒業論文は「秀句ものの狂言」であった。面接は、小島吉雄・岡見正雄、そして伊藤先生の三人であった。この年、玄恵法印の記念の年だとかで、毎日のように狂言会が行われていた。素人会が多かったが、お蔭でほとんどの曲のあらすじは知ることができた。秀句ものが古態を示していると米倉先生が何気なくおっしゃられたのがヒントになっている。

四月、関西大学大学院文学研究科修士課程入学。岡見先生の最初の授業の時、九州大学から赴任されてこられた中村幸彦先生の引越しの手伝いに千里山にゼミ生たちと行った。大型トラック三台には殆ど和書が積まれていた。碩学・人間性に引かれ、先生を「心の親」と仰ぐこととなる。天満宮の文書調査にも院生一同連れて行ってくださった。この体験が、のちに生田本を図書館に入れた時、役に立った。

昭和四九年（一九七四）

三月、関西大学大学院文学研究科修士課程修了。修士論文は

「佐久間寛台と『謠言粗志』」。調査方法は中之島図書館でお会いした森修氏のヒントがあった。夜中、零時過ぎの鈍行で金沢まで何度も通った。初めてユースホステルなるものも知った。論文は『国文学』に掲載された。編集担当は中村先生であった。校正の仕方もわからず、お尋ねしたところ、図書館に『校正必携』という本があるから、それで勉強しなさいと、あきれ顔で教えてくださった。

四月、関西大学大学院文学研究科博士課程入学。

六月、米倉先生の『わらんべ草（狂言昔語抄）研究』（風間書房）の書評が広島大学『国文学攷』六四号に掲載される。大学の紀要に載ったのは初めてである。

昭和五一年（一九七六）

四月二三日、『京都新聞』夕刊に顔写真入りで「和泉流家系考」が載る。藝能史研究会例会発表の要旨を掲載するのは林屋辰三郎氏の発案であった。郷里の父が大変喜んでくれた。

昭和五二年（一九七七）

三月、関西大学大学院文学研究科博士課程所定単位修得後退学。

昭和五二年（一九七七）

四月、武庫川女子大学文学部専任講師。故人となられたが、野

中春水・石川常彦・清原和義等各氏の知遇を得た。石川氏に連れられ、初めて陽明文庫の名和修氏に会い、福島和夫氏から厚遇も得た。

昭和五三年（一九七八）

記録をきちんととっていないので、ここでは業績以外の武庫川女子大での楽しかった思い出をまとめて書く。能楽部の顧問をしていたので、吉井順一師と親しくなれ、湊川神社で仕舞を行ない、唯一の免状もいただいている。

清原氏のピンチヒッターで初めて市民講座を体験。老人大であったようで講演中は反応がわからなかったが、終わったあと、受講生の一人が私のところまで来られ、手をとって、今日の講演はとても素晴らしかったといってくださった。市民講座では気を抜けないと肝に銘じた日であった。のちに小尾郊一氏の一行と台北大学図書館を訪問したこともある。

講堂披きがあり、大フィルの演奏があり、級友の石井博和君が研究室を訪ねてきてくれた。感想を聞くと、確かに素晴らしい講堂だが壁の漆喰が乾いてないので音の広がりがよくないとの返事。プロの音楽家の耳の鋭さに驚嘆した。彼はリタイアした今もお弟子さんを数多抱え、コントラバスのCDも出している。

昭和五四年（一九七九）

三月、武庫川女子大学退職。

四月、関西大学文学部専任講師。一緒に同僚になったのが林省之介氏。よく桂三枝さんの話をしていて、彼がのちに国会議員になるとは思わなかった。初めての海外旅行にも誘ってくれた。北京・西安・洛陽のコース。特に西安昔の長安に感動した。なぜ遣隋使・遣唐使がはるばる訪れたのかなんとなく理解できた。

十一月一日、香西精『世子参求』（わんや書店）の資料収集に協力。吉井順一師が香西精氏のお見舞いに連れて行ってくださるようになっていたが、その前に香西氏がなくなられ、今でも残念に思っている。

七月二四日、大阪能楽観賞会の公演に先立ち「花と能」と題して講演。大阪能楽会館の舞台に初めて立ったのだが、お辞儀が上手だったと皮肉られただけであった。能役者の都合ではなく、愛好者が自分たちの好きな演者を好きな曲で好きな時に見たいという観賞会の理念は素晴らしいものであったが、台所は火の車であった。昭和五七年十一月一日「恋の重荷」について・昭和六〇年五月一四日「采女について」、ひさや大黒堂との共催で太閤園で昭和六一年六月八日「水引

響〉〈神鳴〉・平成一年六月二日「狸々」につついて・平成三年六月二三日「井杭」〈蝸牛〉・一〇月九日「柿山伏」〈棒縛〉の解説もつとめている。

昭和五五年（一九八〇）

四月、関西大学文学部助教授。

昭和五六年度（一九八一年四月〜八二年三月）

国文学研究資料館調査員。専ら琴堂文庫の調査。小林健二・橋本朝生等各氏と親しくなれた。その時の調査カードは、ずっと愛用。堀口康生氏も参加されていた。伊藤先生の発案から三人で未刊謡曲でも読もうかとなった。中世文学研究会が発足したのもこの前後か。先生を慕って実に多くの才人たちが集まってきた。のちに、天野文雄氏が関西に来られ、やはり能楽に特化した研究会が欲しいということでも六麓会が発足したが、先生の理念は、いまだに生きている。

昭和五八年度（一九八三年四月〜八四年三月）

東京で法政大学能楽研究所を拠点として国内研修中、表章氏を始めとして多くの知己を得た。独身の強みで住民票まで移し、一年間、東京人だったこともある。月曜會のメンバーとは、のちのちまで親しくしてもらっている。中でも田口和夫氏に誘われ野村万之丞師（現・萬、人間国宝）に師事、国

立能楽堂での〈鐘の音〉を皮切りに巖島神社能舞台では〈泉山伏〉を田口さんの山伏、御子息の文哉さんを弟として私が兄役をつとめたのは深い思い出となった。幼稚園で習った先生までお呼びしている。また、爾来、萬氏のことばにヒントを得て「筆吟（ペンギン）」をペンネームとしている。

業績には入れなかつたが、この年「関西大学図書館所蔵「杭全家狂言伝書」について・付・関西大学図書館所蔵戦前能楽関係文献目録の能楽関係目録」（昭和五九年一月一日・自費出版）を冊子状の一冊にして配っている。ともかく自分で本を作ってみたかったのである。高木半についても触れたので、西野春雄氏が『能楽研究』九号で取り上げてくれている。

昭和五九年（一九八四）

七月二日、大阪市成人大学講座（大阪市立北市民教養ルーム）で「狂言の展開」と題して講演。その後、やたらと市民講座を引き受けている。関大のためならという意識が働いていたようだ。別に特記以外の地域名だけあげる。大阪府立文化情報センター・千里丘市民センター・千里市民センター・千里公民館・読売文化センター・明日香村中央公民館・箕面サンプラザ・アピオ大阪・伊丹市立中央公民館・寝屋川市立中央公民館・加古川市立図書館・中日文化センター・岡崎市図書

館交流プラザりぶらホール等。

昭和六〇年（一九八五）

六月二五日、金剛能楽堂で「世阿弥と修羅能」と題して講演。
旧金剛能楽堂は、虫干しの時だけ、当時は、舞台上に展示してあるのを拝見するために舞台上がることが許された。厳密な意味での舞台体験は、金剛能楽堂だったと学生諸君を煙に巻いている。

昭和六二年（一九八七）

四月、関西大学教授。

八月二八日、大竹市民講座で「幽玄とをかし」と題して講演。

浅野日出男氏のはからいであつた。級友に花束まで贈られ面はゆい限りであつた。

一〇月一六日、関西大学図書館で「関大・能・本」と題して講演。館員で能楽部OBの藤井隆氏と展示・簡便な目録も作成。

館員の多くの方に聞いてもらえて、その後、図書館に能楽関係の図書が増えるきっかけとなった。

平成一年（一九八九）

九月一二日、和泉市文学講座で「狂言・和泉流」と題して講演。
阪口弘之氏からの依頼。

一〇月二一日、大谷女子大学公開講座で「狂言の歴史」と題し

て講演。小林健二氏からの依頼。彼と、のちに天野文雄氏と共に金蘭女子短大の非常勤を勤めていた。

平成二年（一九九〇）

六月一七日、伊藤正義・百合子御夫妻の媒酌で旧姓福島光代と結婚。翌年、長女弥生が産まれる。産まれた時、一番に抱かせてもらった。目を見つめ、お父さんだよと伝えようとした。玉のような子が産まれたと古典にあるのはウソだと確信した。よく言われるように、皆、同じようなクシヤクシヤ顔なのだ。街中で長生きした父に似た顔立ちの老人に会う。人間、産まれてくる時と、年老いた時は同じような顔で、その間に人生いろいろあるものだ。その娘のお陰で平成八年度には松原市中央幼稚園PTA会長を経験できた。当時、能楽部の顧問もしていて、善竹忠重氏の指導のもと、娘が六歳になった時、親子で〈伊呂波〉を豊中不動尊で演じたこともある。ほかに〈雁磔〉大名（工藤正義・中川浩一と）・〈寝音曲〉（元ゼミ生能智憲二君と）なども演じている。

平成六年（一九九四）

四月、関西大学文学博士。第一論文集『狂言史の基礎的研究』で、主査は片桐洋一先生。

平成七年（一九九五）

六月一日、おおさか文化セミナーで『能面図』をめぐって」と題して講演。実にたくさんの方が来てくださった。いかに皆さんが造形美術に関心があるのかを如実に示している。後日、旧知の面打師見市泰男氏に若女の面を打ってもらい、更に福の神の面も打ってもらった。各種催しや授業の時に、受講者がとても関心を持ってくれる。わが家の家宝である。

一月二五日、吹田市生涯学習センターの「縁台トークから」で、浜村純・桂小米朝・大内祥子・森西真弓各氏と。テレビによく出る人と一緒になるのは初めてであった。恥をかかないように入念にコピーを準備してお客さんにも配ってもらった。しかし、まったく役に立たなかった。浜村氏の独壇場で、客を巻き込み、童謡を歌っていた。マスコミにしょっちゅう出る人の迫力に圧倒されるばかりであった。

平成一七年（二〇〇五）

七月、中野真作氏の勧めで安東伸元氏宅を訪れ、『狂言画写の世界』の序文を書く。関大のすぐ近くにお住まいであることを知り、そのまま安東氏に稽古をつけてもらう。日本笑い学会・授業にも出演され、便宜をはかってくださった。（寝代り）太郎（A&Hホール）・〈神鳴〉雷・〈福の神〉福の神（関大）・

創作（亀岡詣）（関大）など演じる。安東氏の兄が関大音楽部創設時の指導者であったことも知ることとなる。

平成二三年（二〇一一）

片桐洋一先生が文化功労章を受章されたお祝いの席で、指名され、即興狂言を演じる。鳥津忠夫先生の時以上に緊張してしまった。学会の懇親会などでも大方は田口和夫氏と御一緒だったが、即興狂言を皆さんに喜んでもらえている。私というより古典芸能の本来持っている力強さが認識されているのである。私の力量はたいしたことはないが、皆さんの記憶に残っているなら、うれしいことではないか。

平成二六年（二〇一四）

三月二四日、関西大学名誉教授。

三月三一日、関西大学永年勤続表彰

四月、関西大学特別契約教授。

六月、ブリッジ・ウォーター大学のサバス美苗先生の肝煎りで安東伸元師一行とアメリカに渡る。英語狂言も少し試みている。丁度、伊澤修二記念の年として総領事の講演やポストン交響楽団の演奏会などもあった。伊澤修二は日本に唱歌をもたらした恩人だが、日本では、つい忘れられている。ト先生のお陰でハーバード大学燕京図書館にも訪れることができた。

もつと若いころアメリカという国を体験したかったとつくづく感じたことである。

平成二七年(二〇一五)

一月一六日 高大連携演劇で「こい、重荷(謡曲〈恋重荷〉より)・老人役(ゼミ生二回)・たかいし市民文化会館。ゼミでこれほど盛り上がったことはかつてない。

平成二八年(二〇一六)

一二月一七日、関西大学国文学会で最終講演。

平成二九年(二〇一七)

三月三十一日、関西大学退職予定。

非常勤講師

関西大学(Ⅱ部・昭和五二・五三年度)

松蔭女子学院大学(昭和五六年度)

京都女子大(平成三・四年度)

金蘭女子大

委員

〔関西大学関係〕

文学部執行部(平成五～六年度)・教員組合(平成三年度・福利

厚生・平成二四年度副委員長)

東西学術研究所委員(平成二三～二四・二八年度)

国際交流委員会委員(昭和五七～五九年度)

年史編纂委員会委員(平成一八～二〇年度)

出版委員会委員(平成二六年度)

〔他機関〕

神戸女子大学古典芸能研究センター客員研究委員(平成一七～二八年度)

所属した学会

能楽学会(平成一五年設立の発起人のひとり。八月八日の「世

阿弥忌セミナー」、関西での能楽フォーラム開催の世話人(常

任委員)

藝能史研究会(評議員)

中世文学会・日本歌謡学会・楽劇学会・日本笑い学会・和歌文

学会・日本方言学会

社会的貢献

山田高等学校校協議会委員(議長・平成一九年度～二八年度)

関屋俊彦教授著述目録（抄）

*年号は和暦で統一した。

*記号は一部変更した。

*一部表記を改めた。

〔著書（単著）〕

『狂言史の基礎的研究』・和泉書院 平成六年三月三〇日

『新蔵生田文庫蔵書目録并解題』（科研費成果報告書）・遊文舎印刷 平成二二年六月

『続狂言史の基礎的研究』・関西大学出版部

平成二七年三月一五日

〔著書（共著）〕

『天理本狂言六義』、北川忠彦・田口和夫・橋本朝生・永井猛・

稲田秀雄各氏と 三弥井書店

上巻Ⅱ平成六年五月、下巻Ⅱ平成七年五月

〔著書（編著）〕

関西大学図書館影印叢書『勸進能并狂言尽番組』・関西大学出版部 平成六年三月二八日

関西大学図書館影印叢書『能面図』・関西大学出版部

平成七年三月二八日

〔論文・研究ノート〕

「佐久間寛台と『謡言粗志』」・『国文学』・関西大学国文学会

昭和五〇年六月二〇日

「和泉流家系考〜狂言師山脇和泉をめぐる〜」・『藝能史研究』

五五号・藝能史研究会 昭和五一年一〇月三一日

「狂言師野村又三郎家系考」・『武庫川女子大学紀要』二五集・武

庫川女子大学 昭和五三年二月一日

「和泉流家系考補遺」付 資料紹介『狂言由緒略書』・『武庫川

国文』一三号・武庫川女子大学国文学会

昭和五三年三月一五日

「『和泉流狂言由緒書』の性格」・『武庫川国文』第一四・一五号

合併号 武庫川女子大学国文学会 昭和五四年三月一五日

「廢曲〈横山〉考」・『国文学』第五六号・関西大学国文学会

昭和五四年一二月二五日

「能狂言関係の地方資料」・『みやび』一三三号・コミュニティ・サー

ービスKK 昭和五七年一月一日

「山脇和泉元直をめぐる」・『国文学』六一号・関西大学国文学会

昭和五九年一月二五日

「伊香立生津町の狂言について」・『藝能史研究』九一号・藝能史

研究会 昭和六〇年一〇月二〇日

*前年七月二日、同題で『季報 大津市史』三〇号(大津市史編さん室)

に書いたものを発展させたもの。

「狂言師茂山久蔵伝一班」・『国文学』六二号・関西大学国文学会

昭和六一年二月二〇日

「関西大学図書館所蔵 橋本賀十郎狂言台本について」・『関西大

学文学論集 創立百周年記念特輯』・関西大学文学会

昭和六一年一月四日

「島津家蔵黎明館寄託能楽文書について」・『国文学』六四号・関

西大学国文学会 昭和六三年一月三〇日

「観世元章の手紙」・『かんのう』二七二号・大阪能楽観賞会

昭和六三年二月一五日

「往来物にみる能楽史料覚え書き」・『関西大学教職課程研究セン

ター年報』三三三号 平成一年三月三一日

「生田耕一と能楽伝書―関西大学図書館蔵本について―」・『か

んのう』二七六号・大阪能楽観賞会 平成二年二月一五日

「能〈西宮〉の復曲について」・『藝能史研究』一一二号・藝能史

研究会 平成二年一〇月二〇日

「『粟本実鑑集』二十について」・『国文学』六八号・関西大学国

文学会 平成三年一二月

「公開講座の記録 「日本学」公開授業の記録」文責(大倉源次

郎・A. S. ギブズ、P. J. メイキン、G. S. ジョンス

ン共著)『視聴覚教育』一八号・関西大学視聴覚教室

平成七年三月一〇日

「土倉徳三郎狂言本について」・『関西大学文学論集』四四卷一

四号・関西大学文学会・文学部創設七十周年記念

平成六年三月

「愛狂社新作狂言本について」・『国文学』七三号・関西大学国文

学会 平成七年一二月二〇日

「茂山久蔵英政と鏡師青家」・『国文学』七五号・関西大学国文学会

平成九年三月一五日

平成二三年三月

「茂山千五郎家の系譜―八代久蔵英政以前―」・『藝能史研究』一四一号・藝能史研究会
平成一〇年四月二〇日

「基調報告「流動期の狂言をめぐる問題」」・『藝能史研究』一九五号・藝能史研究会
平成二三年一〇月二〇日

「大蔵弥右衛門家蔵『預ケ道具覚帳』について」・『国文学』七八号・関西大学国文学会
平成一一年三月一四日

「唐素材の能・狂言」・『東西学術研究所創立六十周年記念論文集』・関西大学出版部
平成二三年

「大蔵虎政と平尾」・『国文学』八〇号・関西大学国文学会
平成一二年三月一五日

「英訳狂言の問題」・サバス美苗氏と共著・『藝能史研究』一九六号・藝能史研究会
平成二四年一月二〇日

「大蔵虎明と天海」序説・関西大学国文学会『国文学論集』八三・八四合併号 片桐洋一教授古稀記念号
平成一四年一月三一日

「大蔵弥物右衛門家のこと」・鶴崎裕雄編『地域文化の歴史を往く』・和泉書院
平成二四年八月二五日

「狂言〈通巴〉をめぐる―付、翻刻「通巴家文書」―」・『説話論集』一五集・清文堂―平成一八年一月一四日

「戦に翻弄された能楽師たちと修羅能」・『戦争の記録と表象』・関西大学東西学術研究所
平成二五年三月三一日

「近代大阪の演能場」・『国文学』九一号・関西大学国文学会・吉田永宏教授古稀記念号
平成一九年三月

「狂言の流派・家の紹介」・『狂言面の解説』『カラー百科 写真と古図で見る 狂言七十番』勉誠出版
平成二六年

「関大本鷲畔翁狂言『寝代り』復曲」・『国文学』九二号・関西大学国文学会
平成二〇年三月

「梅若座盛衰史試案」・関西大学東西学術研究所・『関西大学東西学術研究所 研究報告書』関西大学東西学術研究所・平成二一年〜二四年度
平成二六年三月三一日

「能・狂言と日本の笑い」・木村洋二編『笑いを科学する ユーモア・サイエンスの招待』新曜社
平成二二年一月三〇日

「新蔵生田文庫所蔵『大西閑雪會員名簿』について」・関西大学『国文学』一〇〇号 関西大学国文学会
平成二八年

「文政九年大坂勸進能と金春安住」・『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』・神戸女子大学古典芸能研究センター
平成二二年一月三〇日

「下田文庫蔵『謡曲八百番目録 福王盛充奥書』の紹介」・『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』一〇号・神戸女子大学
平成二八年

「文政九年大坂勸進能と金春安住」・『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』・神戸女子大学古典芸能研究センター
平成二二年一月三〇日

「下田文庫蔵『謡曲八百番目録 福王盛充奥書』の紹介」・『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』一〇号・神戸女子大学
平成二八年

古典芸能研究センター

平成二八年六月三〇日

「狂言歌謡―『呼声』《蝸牛》に寄せて―」・『国立能楽堂』三八

四号・国立能楽堂

平成二七年八月一日

「わらんべ草」の転写事情」・『紫明』三九号・紫明の会

平成二八年九月二五日

「解説・随想・監修」

「掃墓」・『観世』・檜書店

昭和五二年六月一日

「どれへ行く野村様―（鳴子）を見て―」・『かんのう』・大阪能

楽観賞会

昭和五四年一月三〇日

「伯母ヶ酒」《笠之段》《船弁慶》」・『第一回山村啓雄 幽玄への

誘い』 兵庫県立尼崎青少年創造劇場 昭和五四年八月一日

「月菴宗光」・『みやび』一号・コミュニティ・サービスク

昭和五四年九月一日

「名のある人」・『かんのう』二三八号・大阪能楽観賞会

昭和五五年一月二五日

「野村又三郎家について」・『やるまい会』二二号・名古屋やるまい会

昭和五七年五月一六日

「蛸」について」・『かんのう』二四六号・大阪能楽観賞会

*ペンネーム「やるまい僧」

昭和五七年六月二二日

「薪能について」・『薪能』・奈良薪能保存会

昭和五八年五月一日

「古本つれづれ草」・『関西大学通信』二二二号

昭和五八年一〇月二一日

「和泉の家」・『狂言』・和泉会

昭和五九年九月一六日

「狂言 大蔵流（日本の家元）」・『歴史と旅』・秋田書店

昭和五九年一〇月一日

「〔布留〕観能記」・『能楽タイムズ』四〇三号

昭和六〇年一〇月一日

「資料紹介『現代音楽大観』」・『真謡』三号・真謡会

昭和六〇年一月一七日

「和泉流について」・凶録『狂言展』・読売新聞社

昭和六一年四月

「山脇家の人々・その一」・『華泉』三八号・和泉狂言会

昭和六一年六月一六日

*二〇九月三日『第四回大垣狂言の会』・三〇昭和六二年六月三日『華泉』

三九号・四〇九月三日『第五回大垣狂言の会』・五〇二月七日・六〇平

成一 年六月二四日『和泉会別会』

「橋豊秋氏逝く」・『かんのう』二六七号・大阪能楽観賞会・斎藤

恵子氏と編集

昭和六一年一〇月七日

*翌六二年三月二四日「橋豊秋氏を偲んで」・同二六八号にも

「美濃謡蹟めぐり同行記」・『かんのう』二六九号・大阪能楽観賞会*筆名「西宮生」
昭和六年五月一九日

「巖島神社狂言奉納」・『観世』・檜書店
昭和六年八月

「能の世界展観目録」・関西大学図書館・*藤井収氏と

昭和六年九月二二日

「三宅藤九郎家の歴史」・『和泉会別会』・狂言和泉会

昭和六年五月二二日

「資料紹介・新蔵能楽資料―鴻山文庫との関わり―」・『籍苑』二九号・関西大学図書館
平成一年九月

「生田耕一と能楽伝書」・『かんのう』二七六号・大阪能楽観賞会

平成二年二月一五日

「芸能史研究の展望と課題」・『日本芸能史』七卷・芸能史研究

会・法政大学出版局
平成二年三月二〇日

「ときめき芸能鑑賞 狂言」・『淡交』・淡交社

一 (大蔵流) 平成二年八月一日

二 (和泉流) 九月一日

三 (鷺流) 一〇月一日

「外国人留学生科目「日本学」を担当して」・関西大学研究センター報
一五号 関西大学一般教育等研究センター
平成三年三月三二日

「上方芸能(二)ジャンル」への招待「能」・『上方芸能』一〇八号・上方芸能編集部
平成三年七月一〇日

「クラブ活動いま・昔―顧問教授の目―」・能楽部、第二回新能めざして」・『関大』四一四号・関西大学校友会
平成三年十一月一五日

「故北岸佑吉氏蔵能楽写真について」・『かんのう』二八四号・大阪能楽観賞会
平成四年一〇月三日

「沼艸雨先生追悼特集」・『かんのう』二八五号・大阪能楽観賞会
平成五年二月二〇日
*斎藤恵子氏と編集

「パンフレット〈恵美寿〉本文作成協力」・吉井順一氏・西宮市民会館
平成五年二月二七日

「上方芸能への招待Ⅱ 能―様々な試み―」・『上方芸能』一一四号・上方芸能編集部
平成五年四月一〇日

「もう一度キャンパスへ―名物講師」・『ケイコとマナブ』二号・リクルート*インタビュー記事
平成五年五月二日

「〈なわなない〉について」・『片山九郎右衛門後援会々報』五三三号・片山九郎右衛門後援会
平成五年五月一五日

「復曲〈恵美須〉について」・『観世』六〇巻八号・檜書店
平成五年七月一日

「勸進能并狂言盡番組」項目・『おおさか文藝書画展』・関西大学

図書館 文学部創設七〇周年記念実行委員会

平成六年九月二二日

〔「関西大学図書館影印叢刊」について〕・「籍苑」三九号・関西

大学図書館

平成六年九月三〇日

〔影印叢書二題〕・「能」・京都観世会館

平成六年一〇月

〔名作〈井筒〉をめぐって 世阿弥、その夢幻能の世界〕・淡交

ムック『能 入門 鑑賞へのいざない』・淡交社

平成七年五月

〔「無布施経」について〕・「林喜右衛門二十三回忌追善能」・林喜

一郎

平成七年一月二五日

〔生涯学習フェスティバル 縁台トークから〕・「市報すいた」七

九二号・吹田広報課

平成七年一月二五日

〔大阪人と能〕・『大槻能楽堂会報』四五号・大槻清韻会能楽堂

平成八年一月一日

〔「世阿弥忌」研究セミナー〕・「金剛」一四八号・金剛雜誌会

平成九年一月一日

〔「狂言 二、狂言の展開 (二) 江戸時代 (三) 明治・大正時

代 (四) 昭和時代〕・勉誠社『講座日本の演劇三 中世の演

劇』

平成一〇年二月一〇日

〔新春を寿ぐ〈翁〉と狂言の会〕・志芸の会

平成一二年一〇年まで

〔「新世紀へ続く」世阿弥以来の盛況〕・「上方芸能」一三八号・

上方芸能編集部

平成一二年二月一〇日

〔第五回「世阿弥忌研究セミナー」〕・「金剛」一六〇号・金剛雜

誌会

平成一三年一月一日

〔狂言について―大蔵流を中心に―〕・住吉大社『すみのえ』二

四三号・住吉大社

平成一三年二月二〇日

〔能〈西宮〉について〕・パンフレット『廣田神社御鎮座壹千八

百年式年祭奉祝能』廣田神社

平成一三年一〇月二〇日

〔シンポジウム・笑いとコミュニケーション・悪態の効用〕『日

本笑い学会新聞』・日本笑い学会

平成一四年二月二一日

〔室町時代の天才たち〕・「華道」・日本華道社・一月「世阿弥」・

二月「大槌(狂言師)」・三月「二条良基」・四月「佐々木道

誉」・五月「夢想疎石」・六月「一休宗純」・七月「一条兼良」・

八月「宗祇」・九月「雪舟」・一〇月「狩野元信」・十一月「村

田珠光」・十二月「池坊専慶」平成一五年一月号〜二月号

〔大阪と狂言・狂言師〕・「生活文化」二二〇号・生活文化研究所

平成一五年二月一五日

〔「狂言〈伊文字〉の周辺」〕・「紫明」一二号・紫明の会

平成一五年三月二〇日

〔「通円」をめぐるって〕・『第二回廣田鑑賞会能』・廣田幸稔会

平成一六年五月一日

〔新藏生田文庫について〕・『関西大学図書館フォーラム』・関西大学図書館
平成一六年六月三〇日

〔新生田文庫の能楽資料〕・『平成十六年度秋季特別展展観目録』・関西大学図書館
平成一六年十一月一日

〔江戸時代の天才たち〕・『華道』・日本華道社・一月「大蔵虎

明」・二月「天海」・三月「本阿弥光悦」・四月「小瀬甫庵」・

五月「伊藤仁斎」・六月「出雲のお国」・七月「松尾芭蕉」・八

月「井原西鶴」・九月「近松門左衛門」・一〇月「後水尾院」・

十一月「住吉如慶」・一二月「池坊専好」(二代)

平成一六年一月号～一二月号

〔「狂言豆知識」〕・『あらすじで読む 名作狂言』・世界文化社
平成一七年八月二〇日

〔大阪町人の社交場―浮瀬の跡―〕・『ESTRELA』一三八号

平成一七年九月一〇日

〔夜風に吹かれて～土蜘蛛～〕・『第二七回 大阪城新能』・読売

新聞社
平成一九年八月

〔対談 生田秀・耕一を語る―小鼓の話―〕・生田秀昭氏と『関

西大学図書館フォーラム』一〇号・関西大学図書館
平成一七年六月

〔序文〕安東伸元・中野慎子著『狂言画写の世界』・和泉書院
平成一七年七月二五日

〔「蝸牛」は薬〕〔「附子」の砂糖〕・『第七十四回川崎市定期能』・川崎市能楽堂
平成一八年三月四日

〔鷲畔翁本(寝代)復曲〕・『大和座通信』・大和座狂言事務所
平成一九年二月二四日

〔図書館の歩き方〕・キャリアアセンター』・『知のナビゲーター教

授マニユアル』・関西大学文学部
平成一九年二月二八日

〔担任島津忠夫先生〕・『島津忠夫著作集』一―卷月報
平成一九年三月一五日

〔雑誌『能海』の行方〕・『関西大学視聴覚教育』三〇号・関西大

学視聴覚教室
平成一九年三月三一日

〔夜風に吹かれて―土蜘蛛―〕・『大阪城新能』・読売新聞社
平成一九年八月三〇日

〔「苞山伏」〕〔「樋の酒」〕・『第八十回川崎市定期能』・川崎市能楽堂
平成一九年九月一日

〔うたって笑って―狂言研究入門―〕・『笑いの科学』・松籟社
平成二〇年五月

平成二〇年五月

平成二〇年五月

平成二〇年五月

平成二〇年五月

平成二〇年五月

平成二〇年五月

平成二〇年五月

平成二〇年五月

平成二〇年五月

平成二〇年五月

「大阪町人の社交場―浮瀨の跡―」・『上方文化を探索する』・関

西大学出版部 平成二〇年一〇月一〇日

「空腕」一考」・『第十一回狂言の会』・国学院大学

平成二〇年一〇月一四日

「翁」と猿楽」・『志芸の会』一〇回・志芸の会

平成二〇年一二月一三日

「悪態の効用（シンポジウム）笑いコミュニケーション」・『笑

いの世紀―日本笑い学会の一五年―』・創元社

平成二二年八月二〇日

「劇的变化―能楽は変化する―」・『紫明』二五号・紫明の会

平成二二年九月二〇日

「能・狂言と日本の笑い」・木村洋二編『笑いを科学する―ユー

モア・サイエンスへの招待』新曜社 平成二二年一月三〇日

「木村先生の幽霊を演じて」・『木村洋二先生を偲ぶ』・同制作委

員会 平成二二年三月七日

「あらすじ（楊貴妃）（清水）（鶴）」・『第三七回篠山春日能図

録』・篠山能実行委員会 平成二二年四月一〇日

*以後、平成二八年まで毎年執筆。平成二五年から監修もつとめる。

「狂言の魅力―敷居は低く、奥は深く―」・『上方芸能』一七六

号・上方芸能編集部 平成二二年六月

「ならまち（奈良町）」・『関西のまち』・明治安田生命保険相互株

式会社 *以後、平成二八年まで、ほとんど毎年執筆

平成二二年六月

「よく通る声」・『上方芸能』一七九号・同編集部

平成二三年三月一〇日

「風物詩 おん祭異聞」・『生活文化』二二九号・生活文化研究所

平成二四年一月一五日

「能・狂言の神」・『紫明』三〇号・紫明の会

平成二四年三月一一日

「ヨーロッパ能楽談義―ルーヴェン・カトリック大学での能楽公

演によせて―」・『EUと日本学―あかねさす』国際交流―』・

関西大学出版部 平成二四年三月一五日

「船弁慶」雑感」・『廣田鑑賞会能』一八回・廣田鑑賞会

平成二四年四月一一日

「狂言論『わらんべ草』の環境」・『生活文化』二七二号・生活文

化研究所 平成二四年一〇月一五日

「大蔵虎明と『わらんべ草』」・『国立能楽堂』三五一号・独立行

政法人日本芸術文化振興会 平成二四年一一月一一日

「井狩辰吉狂言本について」・『能』六五八号・京都観世会館

平成二五年三月

「世阿弥と狂言師」『観阿弥生誕六八〇年 世阿弥生誕六五〇年 記念 世阿弥の世界』・京都観世会 平成二六年

「狂言歌謡（呼声）（蝸牛）に寄せて」・『国立能楽堂』三八四号・日本芸術文化振興会 平成二七年八月一日

「トラウマ『東海道四谷怪談』・『矢の会』五八号 平成二八年
「Okura Toraki (ra) : comic texts and theory」・CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS. *英訳はMINAE YAMAMOTO SAVAS 平成二八年

「上方芸能一四ジャンルへの期待」狂言 秘められている発展性」・『上方芸能』一九九号、上方芸能 平成二八年

「関西大学『国文学』一〇〇号の歩み 国文学（中世）」・関西大学『国文学』一〇〇号 関西大学国文学会 平成二八年

『伊藤正義 中世文華論集』第二卷・和泉書院・総頁六一二頁（稲田秀雄氏と編集）

【翻 刻】
「夜討曾我」〈和田酒盛〉「幸若舞曲研究」第二卷・三弥井書店（青木晃ほか「関西大学図書館所蔵『まごまご』」）

「国立公文書館蔵『猿楽者分限帳』」・『能 研究と評論』一一二号・昭和五六年二月二八日

月曜会 昭和五九年五月一日

「鷲流狂言『宝曆名女川本』（一）（六）（北川忠彦氏と共著）
京都女子大学国文学会『女子大國文』一〇五～一〇号 昭和六三年～平成二年

「遊音抄」（天理図書館蔵）第四冊・和泉書院『磯馴帖 松風篇』 平成一四年七月

「大蔵弥右衛門家蔵『狂言印可状』」・能楽学会『能と狂言』創刊号（ぺりかん社） 平成一五年四月

「史料紹介『和泉流狂言太夫野村家由緒』」・『国文学』九六号・関西大学国文学会 浦西和彦教授古稀記念号 平成二四年

「狂言印可勘状」・能楽資料叢書Ⅰ・田口和夫校訂『大蔵虎清間・風流伝書』・野上記念法政大学能楽研究所 共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学術的研究拠点」 平成二七年三月三十一日

『金春安住集』歌舞後考録』『御用留』、野上記念法政大学能楽研究所共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学術的研究拠点」 平成二七年

【新聞掲載】
「和泉流家系考」・京都新聞社「京都新聞」夕刊 昭和五一年四月二三日

昭和五一年四月二三日

昭和五一年四月二三日

「狂言師三宅藤九郎家のこと」・京都新聞社「京都新聞」夕刊

昭和五七年六月二七日

「伊香立生津町の狂言」・京都新聞社「京都新聞」朝刊

昭和六〇年三月二四日

「能」西宮の復曲」・京都新聞社「京都新聞」朝刊

平成二年三月二〇日

〔書評〕

「米倉利昭著『わらんべ草（狂言昔語抄）研究』・広島大学『国文学攷』第六四号

昭和四九年六月

「安東伸元・中野慎子著『狂言画写の世界』」・『藝能史研究』一

七二号・藝能史研究会

平成一八年四月二〇日

「小林貢・西哲生・羽田昶著『能楽大事典』」・『楽劇学』二〇号・

楽劇学会

平成二五年三月三〇日

〔事典項目〕

「喜阿弥」・『平凡社大百科事典』第三卷・平凡社

昭和五九年一月二日

「増阿弥」・『平凡社大百科事典』第八卷・平凡社

昭和六〇年三月二五日

「和泉流・大蔵流・鷺流」・『日本文学史』京都書房

昭和五七年九月

「近藤乾三・浅井紀伊之介・桜間弓川・花伝・拾玉得花・花鏡」・

『芸能名言辞典』東京書籍

平成七年九月

「野村万蔵（六世）」・『民間学事典 人名編』三省堂

平成九年六月一〇日

「その他（外部資金の獲得状況）」

平成一八〜二〇年度科学研究費補助金 基盤研究（C）「能楽資料の調査と整理―大蔵弥右衛門家所蔵伝書と新生田文庫本

―」研究代表者平成一九年八月四日 日本学術振興会「ひらめき☆ときめきサイエンス」うたって笑って〜狂言研究入門

〜」於関西大学BIGホール

*記録は「うたって笑って〜狂言研究入門〜」・『笑いの科学』

第一号・松籟社

平成二〇年五月